

聴覚障害者の日本語教育と学習支援

半田淳子・Joseph Rees

はじめに

本稿は、2007年9月から、1年本科学学生(OYR)としてICUが受け入れた聴覚障害者 Joseph Rees の日本語教育と学習支援に関する報告である。本人の了解を得て、実名のまま情報を公開する。というのも、Rees は ICU での経験が広く知られることで、聴覚障害者の日本語教育への理解が進むことを強く望んでいるからである。

今日、少数ではあるが、様々な障害を抱えた留学生在が日本語学習に取り組んでいる。その一方で、受け入れを拒む教育機関も少なくないと聞いている。実際、Rees も留学の希望を出した際に、ICU 以外の大学からは受け入れを拒否されたとのことである。障害者がどのような支援を必要としているかを具体的に知ることによって、今後は、そうした状況を改善できるはずである。筆者は、障害者の言語教育の専門家ではないが、Rees が日本語教育プログラム(JLP)を履修していた折、取り出し授業のコーディネートを担当していた。その経験を踏まえ、今回、日本語を学習する聴覚障害者にとって、どのような支援や配慮が必要なのかを4項目に分けて報告したい。

なお、本稿の最後に、Rees が 2007 年 12 月 5 日に ICU の Special Faculty Seminar で発表した原稿と、帰国後の 2008 年 9 月 3 日に送ってきた書簡を掲載した。本文の内容は、それらと一部重複する箇所もある。その他、日本語のクラスを担当した教員や学生チューターのフィードバック、コース終了後の Rees のインタビューなども紹介する。

1. 学習者を知ること

障害の程度はもとより、障害を持つ学生の言語学習の方法や目的、ニーズは様々である。どのような支援が必要であるかを考える上で、学習者のことをできるだけ具体的に知っておくことは不可欠である。また、本人の要望をできるだけ尊重することも忘れてはならない。

Rees は 1986 年生まれのイギリス人学生である。聴覚に先天的な障害を持っている。高周波数の音が殆んど聞こえず、人工内耳と Radio-Aid と呼ばれる器具の助けを借りて、会話の 20% から 25% 程度を理解することはできる。母音は聞き分けられるが、子音を聴き取るのは難しいということである。両親は聴覚障害者ではなく、手話は使わず、子どもの頃から周囲とのコミュニケーションは口頭で行なわれてきた。リップリーディング(読唇術)である。

ICU の OYR として来日した時は 20 歳で、シェフィールド大学(The University of Sheffield)の学生であった。来日は2度目で、高校生の時、2週間ほど江戸川区にホームステイをしている。イギリスは、障害を持つ学生の就学のために助成金を設けており、なかでもシェフィールド大学は、聴覚障害者への支援が充実していることで有名である。Rees は、シェフィールド大学では、以下の4つの支援を受けていた。

1. 授業中、教員に Radio-Aid を首から装着してもらう。

2. 各授業にノートテーカーをつけ、授業内容を記録してもらう。
3. 授業内容の確認のため、授業外に個別指導を受ける。
4. 試験時間を 25% 程度、延長してもらう。

Radio-Aid は、携帯電話くらいのサイズのもので、主として、授業中、教員の首から提げる形で使用される。Radio-Aid には 3 種類の切り替えボタンがついており、それによって使い方が異なっている。例えば、クラスで討論などを行なう場合は、Radio-Aid を机の上に置き、広範囲の音が拾えるボタンを押す。或いは、パーティーの時などは、別のボタンを押すことで、対面者の発話のみを残し、雑音を遮断することができる。ただ、Radio-Aid は、装着している教師の発話を送るが、それに対する学生の反応は送信されない。それゆえ、教室では座り方を工夫し、全員の口唇が見えやすいように、学生が丸く座るなどの配慮が必要である。更に、ノートテーカーを配置し、教室内の遣り取りを書き留めてもらうことも必要である。リップリーディングは、当然のことながら、教師が板書しながら説明したり、窓の前に立って発話したりすると、口唇が確認できず、内容の理解が難しくなる。また、日本語のリップリーディングには不慣れなので、早く話されるとリップパターンの認識が難しいなど、幾つか注意すべき点もある。更に、リップリーディングには個人差があり、相手が年長者であるほど難しくなるようである。年齢が若くても、口の動きが小さい場合や、口ひげがあるような場合も難しい。逆に、身振り手振りが大きい人は分かりやすく、適切なボディランゲージは理解を助けるとのことである。

Rees は、シェフィールド大学入学前に、Hendon Secondary School で 4 年 2 ヶ月（週に 2 時間）日本語を履修しているが、当初はフランス語を選択したそうである。しかしながら、フランス語は聞き取れない音が多く、履修を断念した。次に、ドイツ語の履修を考えたが、ドイツ語は低周波の音が多く、また喉の奥で発音されるため、リップリーディングが難しく、同様に履修を断念せざるを得なかったのである。このように、日本語を選択したのは、フランス語やドイツ語に比べて、発音の聴き取りが容易だったためであるが、とはいえ、外国語学習が大きな挑戦であることに変わりはない。当然のことながら、日本語のリップリーディングに慣れるまでには、多くの時間と労力を要する。例えば、日本語の音声に関しては、「あいうえお」などの母音の聞き分けには問題が無かったが、「ち (chi)」「し (shi)」「す (su)」「つ (tsu)」の音の聞き分けが特に難しかったと語っている。

2. 学習者の希望を尊重する

Rees の専攻は Japanese Studies（日本研究）である。シェフィールド大学で 1 年 6 ヶ月（週に 6 時間）日本語を勉強してから来日した。ICU 入学時の日本語レベルに対する自己評価は、Reading と Writing が good で、Speaking と Listening が Fair であった。シェフィールド大学の場合は、written Japanese や Translation skills が中心のようで、事前調査書には、ICU の JLP で Speaking を鍛え、ネイティブのような発音になりたいと目的が記されている。その他、新しい環境や生活、友だちへの興味も留学の動機として挙げられている。

OYR の新学期は 9 月に始まる。シェフィールド大学の日本研究の学生の場合、JLP は必修科

目であり、その上、留学の目的も日本語教育にあったので、Rees は秋学期からインテンシブコースを希望した。インテンシブコースは、月曜日から金曜日まで、1日4コマ（1コマは70分）のコースである。プレイスメント・テストの結果、インテンシブ2（初級後半から中級前半まで）を受講することになった。テキストは、前半が『ICUの日本語 Japanese for College Students』Vol. 3で、後半が『日本語中級 J301』（スリーエーネットワーク）を使用した。4技能を網羅したコースであり、テキストの内容を学習する他に、午後のクラスを中心に Speaking、Extra Reading、Video、Listening のクラスが設けられていた。

秋学期は、ビデオとリスニングのクラス（週に計2コマ）への出席を止め、個別に取り出し授業を行なった。当初、ビデオのクラスにも出席する予定であったが、内容がアニメの『となりのトトロ』であったため、リップリーディングが難しく、出席を断念した。週2コマの取り出し授業は、日本語教授法I&IIを修了した複数の日本人学生が交代で担当し、7週間で計14回の取り出し授業を行なった。なお、当初は、チューターを1人か2人に固定することを考えたが、まず全員と面談し読唇のし易さを判断してもらった結果、どの日本人学生も問題ないというので、交代で担当する形を取った。また、JLPの成績評価には、取り出し授業の部分は含まず、全体の割合からビデオ（5%）とリスニング（6%）を除いて計算された。

冬学期も引き続きインテンシブ3を取るようになった。先学期のインテンシブ2と同様、Extra Reading、Video、Listening のクラスが設けられ、その他にプロジェクトワークのクラスと、それに付随して、発表の準備や練習、討論のためのクラスも設けられた。初中級の語彙や漢字の復習なども適宜行なった。インテンシブ3は中級後半から上級レベルへの橋渡しになるコースで、テキストは『日本語中級 J501』（スリーエーネットワーク）を使用し、後半は上級レベルを意識した生教材と、小説の読解とブックレビューが用意されていた。

インテンシブ3でも、リスニングのクラスには出席せず、週に1コマの取り出し授業に参加した。今学期も、日本人学生が交代で個別指導を行ない、成績評価からはリスニング（5%）を除外した。一方、ビデオのクラスは、本人の希望を尊重して、最初から出席した。インテンシブ3のクラスで使用したビデオ教材は、「レンタルラブ」（ドラマ）「プロジェクトX」（ノンフィクション）「クローズアップ現代」（特集ニュース）の3本である。上級コースでも使用している教材のため、「レンタルラブ」を除いては、中級後半の学生にはやや難しかったようだ。

ビデオのクラスを担当した教員によると、Rees は毎回出席し、よく発言していたようである。本人も「難しかったが、頑張ってみたかった。ビデオの視聴は良い経験だった」と話している。先学期はアニメーションだったので、ビデオのクラスに参加できず、残念に思っていたようで、「自分を特別扱いせず、皆と同じように扱ってくれてむしろ嬉しかった」と感想を述べている。聴き取りは毎回、ワークシートに聴き取れたものを書き込ませた。画面から話し手の口唇の動きが判断できるものや、ニュースなど字幕の出るものは問題なく聴き取り、その後の話し合いにおいても良く発言したが、逆に音声だけの場合は難しく、全く議論に参加できなかった。それでも、毎回熱心にクラスに参加し、ディスカッションなどもコンテキストから内容を推測できるような部分については、積極的に発言していた。ニュースには新出語彙も多く、口唇から音は分かっても、単語の意味が理解できない場合もあったので、字幕があっても、内容によっては難しいと感

じたこともあったようである。

3. 支援とは相互交流の場である

先にも述べたように、取り出し授業は日本語教員養成プログラムを受講した日本人学生が交代で担当した。コーディネートをしていて感じたことだが、取り出し授業は同世代の学生同士の交流の場であり、同時に学びの場にもなったようである。その一方で、どの学生にとっても聴覚障害者の日本語教育は初めての経験であったので、障害に関してどのように向き合って良いかわからず、障害の程度について率直に聞けないというような遠慮もあったようである。

取り出し授業は、本人の希望を優先し、発音指導や読みの練習を中心に行なわれ、満足のいく内容であったようだ。その他、読んだ内容に関して話し合ったりもしたので、インタビュー試験にも役に立ったとのことである。なお、チューターについてだが、基本的には同じ人が良いが、読唇が分かりやすければ、複数でも大丈夫とのことである。1対1の個別指導であり、いつも和やかで楽しそうな雰囲気のもと指導が行なわれていた。

以下は、取り出し授業を担当した学生からのフィードバックである。項目別に箇条書きで示したため、原文通りではないが、内容はそのままである。

(1) チューターの際に、特に気をつけた点は何か。

- 細かい発音の違いに注意して、できるだけはっきりと発音するように心がけた。
- 少しの間違いでも訂正するようにした。
- 読唇ができるように、ずっと顔を上げて、相手の顔を見て話した。
- 声を大きく、1.5 倍くらい出した。
- 目を見てゆっくり話した。
- 理解しているかどうか、通常より少し多めに確認した。

(2) 指導上、難しいと感じたことは何か。

- 特になかった。
- 想像していたような難しさはなかった。
- 細かな発音（例えば「しゅ」と「ちゅ」のような）の訂正に、何度も反復練習をしなければならなかった。

(3) こうすれば良かったと思う点はあるか。

- 発音を重点的にやって欲しいとのことだったので、文章を読んで発音のおかしなところや、読めなかった漢字を直したり、もう一度読んでもらったり、後に続けて読んでもらったりというようなことをした。いつも、ほとんど読みだけになってしまい、内容まで細かくできなかった。

- 発音に関しては、細かい間違い（濁点がついていない、逆に、変な箇所に付いているなど）が多かったり、一回目で正しく読めても次で間違ってしまったりすることもあったので、何度も繰り返し練習できたら良かった。
- どのようにチュートリアルをして欲しいか聞く機会を多く持てば良かった。
- もっと障害の状態について知っておけば良かったと思う。本人にはどうしても聞きづらかった。

(4) 特に支援が必要だと感じた点は何か。

- 日本語のリズムは、リップリーディングからだけでは習得しにくいのではないと思う。本人も、自分の話し方が流暢だとは思えないと言っていた。
- 彼の日本語能力全体から見ると、特に発音が苦手なように感じた。何度も同じところを間違えたり、「ちょ」が「ちゅ」になっていたり、一度注意して直っても、次にまた同じ間違いをすることもあった。

(5) 聞き取りに関して問題はあったか。

- こちらの発話が聞き取れないで困るようなことは無かった。
- 分からない単語が出てきて、聞き取れないということ以外は特に無かった。
- 教室内とは異なり、戸外では、雑音が多いと、聞き取りに問題が出やすくなるようだ。

(6) チュートリアルをして気づいた点は何か。

- いつもとても前向きに頑張っていたので、教えられて、とても楽しかった。
- 本当に熱心な学生で、拙いチューターの私を助けてくれようとしていた。試験結果は、リーディングの成績があまり良くないとのことだった。スピーキングの時は空気を書いてある文字を思い浮かべて、それを読む感じで話していると語っていた。
- 明るくてとても頭の良い学生。一度覚えた漢字や単語の読み方、抑揚などは、次に出てきた時に覚えていて、日本語を勉強する意気込みが伝わってくる。毎回、自分からやりたいことを提示してくれるのでやりやすい。好奇心旺盛で、文化や TV の話など勉強以外のこともたくさん話した。私にとって貴重な経験になった。

4. 自己評価を高めること、弱点を知ること

来日から 6 ヶ月が過ぎた頃、Rees にインタビューを行ない、日本の生活や日本語学習についての様子を聞いた。Rees は、来日当初から、キャンパス内の男子寮に住んでいた。そのため、利便性もさることながら、異文化の中で生活するストレスや孤独感に悩まされずに済んだと語っている。また、ICU は小規模の大学なので、家族的な雰囲気があり、居心地が良かったとも述べている。また、JLP に関してだが、イギリスは「読み書き」や翻訳が中心だが、ICU は聴くことや話すことにも力を入れており、日本語能力で不足している点を補うことができたとのことである。更に、JLP は時間数も宿題も多く、学期中はとても疲れたが、作文の宿題をすることで、日

本語を書くことも早くなったように思うと述べている。

コース中に一番難しいと感じたのは、新出単語の理解だったようである。中上級の場合は、生教材も扱うので、未習の単語が多い。リスニングの場合、母音を聴くことはできるが、子音が聞こえないので、単語を全部書き取るのは難しい。また、たとえ子音が聴き取れても、新しい単語の場合は、漢字を書いたり、意味を推測したりすることができない。このような場合、ノートテーカーがいれば、学習者の隣に座って授業内容を全部書きとめてくれるので、聴きながらノートを読むこともでき、漏れを防ぐことができる。ノートテーカーは絶対に必要な支援の一つである。

今回、Rees の支援に関わって、気づいたことが2点あった。1点目は、本人の自己評価の低さである。取り出し授業を担当した学生たちのコメントにもあったように、Rees は大変に真面目な学生である。インテンシブ2&3のヘッド講師も、積極性、向学心、勉強量、発話の多さ、リーダーシップを高く評価していた。実際、勤勉な学生で、一日5時間以上を日本語の勉強に費やしていた。内容は、宿題や、翌日のクイズの勉強、新出語彙や漢字の暗記、予習などである。日本語能力も高く、「聴く・話す」に関しても、聴覚障害があることを忘れてしまうほどで、同じコースの学生と比べても大きな差はない。勿論、細かな発音上の間違いはあるが、それらはどの学生にも認められるもので、障害ゆえの間違いであるとは思われなかった。これは、筆者だけでなく、日本語指導に関わった教員全員の意見でもある。

しかしながら、Rees の場合、特に発音や会話に関する自己評価が低く、「日本語が上手ではない」という発言をたびたび耳にした。恐らく、自分自身の発音を他の学習者のそれと比較して相対化できないので、評価が下がるのではないかと考えられる。また、彼の希望通り、個別指導では発音の訂正に時間をかけたが、そのことで逆に「日本語が上手ではない」との印象を持たせてしまった可能性もある。折に触れて、自己評価を高めるようなコメントを与えたが、苦手意識の強い発音や会話に関して、もっと自信を持ってもらうにはどうしたら良いか考えてみる必要がある。

もう1点は、実は、Rees は話すことよりも、読むことの方に困難さを抱えていたということである。彼は真面目な学生であったが、その熱心さは必ずしも期末テストのスコアには反映されなかった。特に、4技能の中でも、本人が不得手と思っている会話より、読解の得点の方が伸びなかった。本人にとっても、この結果は意外なものであったようである。

近年、聴覚障害者の言語教育に関しては、手話を第1言語とし、書記を第2言語とするバイリンガル教育を推進する機運が高まりを見せている。日本でも、2008年に、バイリンガルろう教育の学校である「明晴学園」が誕生した。ジム・カミンズ(2008)は、ろう児のバイリンガル教育にも第1言語と第2言語の相互依存仮説が適応できるとし、第1言語としての手話の使用を重視し、その根拠の一部として、「ASL(注：アメリカ手話)の力と英語の読み書きの力との間に有意の関係があった」とするプリンツとストロングの研究(1998)や、「ASLと指文字がよくできる児童生徒は、英語の読解力も高かった」というパデンとラムゼイの研究(1998)を紹介している。つまり、「就学前に言語(注：手話)を通して概念的基盤をしっかりと獲得することが、その後の英語の読み書きの力の発達の前提条件」であるということである。

Rees の場合は、リップリーディングによる理解が中心で、英語でも日本語でも、手話を全く

使わない。ICU には日本手話ができる日本語教師もいない上、Rees 自身もリップリーディングによる学習を希望したので、言語教育における手話の重要性に対する認識が欠けていた。カミンズらの指摘は、ろう児の手話の力と第2言語である英語の読解力の関係についてだが、今回の支援を通じて、同じような傾向が Rees の日本語の読解力にも認められることが明らかになった。即ち、音声言語とリップリーディングを通じて「話す」「聞く」の教育を受けた Rees の場合、「読み書き」が遅れがちで、潜在的に苦手である可能性は高く、当初から注意を喚起すべきであったのである。取り出し授業の内容も、発音や会話の練習だけでなく、「読解」指導に多くの時間を割くべきであったと思われる。

おわりに

聴覚障害者の学習支援のコーディネートを通じて、筆者自身が学んだことは、「学習者を知ること」や「学習者の希望を尊重すること」の大切さである。学習者によって、障害の程度も支援の内容も様々なので、事前に話し合いを重ね、できるだけ学習者の希望に沿った適切な対応をすることが必要である。また、「支援とは相互交流の場」でもあり、支援に関わる人間が必ずしも専門家である必要はなく、むしろ同世代の学生同士の方が良い場合もある。無論、時には専門家の意見を聞くことも大切だが、学習を支援する過程そのものに、多くの学びと気づきの機会がある。更に、学習に対する評価の問題である。障害ゆえに、自他とも能力が正しく認識されない場合も多く、特に「自己評価を高めること」は大切であると感じた。と同時に、障害者それぞれが抱えている「弱点を知ること」も忘れてはならない。できるだけ早い時期から、弱点を克服するための指導が必要であり、その場合は専門家との連携が不可欠である。障害者の言語能力の評価方法も、障害の種類と程度によって見直されるべきであろう。

参考文献：

ジム・カミンズ (2008) 「手話力と学力との関係に関する研究」全国ろう児をもつ親の会編、佐々木倫子監修『パイリンガルでろう児は育つー日本手話プラス書記日本語で教育を！』生活書院、79－118 頁

Hearing Impairment and Special Needs Provision: An English Perspective

Speaker: *Joseph Rees*, The University of Sheffield (BA Japanese)
International Christian University (OYR)

My Personal Background:

I was born deaf. I have lost almost all of my high frequency hearing and so wear hearing aids in both ears. Consequently, I can hear about twenty percent of speech. This means that I can hear mostly vowel sounds. I find consonants very difficult to hear and so lip-read in order to work out what people are saying to me. This means that in Japanese sounds which are very difficult for me to hear sounds such as, ち(chi), し (shi), す(su) and つ(tsu) which are almost impossible for me to distinguish.

My family has no history of deafness and so I was brought up in an English speaking environment. I attended a specialist primary school and secondary school where I learnt sign language but also had extensive speech therapy in order to improve my language skills.

The kind of support I receive at my home institution (The University of Sheffield, UK):

The Government provides funding for disabled students to gain access to education. I use my funding in order to have a number of aids at university. I currently have:

- 1) A Radio-Aid. This is a hearing device which transmits sound straight to my hearing aids. It is a one way receiver of sound and I give it to my teachers so I can hear them clearly. The radio aid also blocks out background noise and so I often use it in other places as well such as the canteen when I am with my friends.
- 2) I have note-takers who write down everything that happens in the lessons to ensure that I do not miss anything.
- 3) I find that One-to-One lessons are really useful to consolidate what I have learnt and to check for mistakes and things have not heard correctly.
- 4) I also have twenty five percent extra time in exams

Sheffield University is well known in the UK for providing support for students with hearing impairment and is one of the main reasons why I chose to go there.

My opinions of the support I receive from ICU:

Although the support system at ICU is not very advanced and there is limited specialist knowledge of the support deaf students need, my opinions of ICU are favorable. This is because all of the staff at ICU have been more than willing to help me and arrange an individual support system for me. This is the most important thing about special needs provision. It is the recognition that every disabled person is different and has different needs.

Suggestions regarding support at ICU:

Many Universities and schools in the UK have in recent years adopted 'disabled-friendly-forms of teaching'. This is because it not only makes students and teachers more able to meet the needs of disabled students but also it is conducive to learning generally. Many things which you should do as a teacher of a deaf student, such as:

- 1) Not turn your back on the pupils while talking
- 2) Provide standardized handouts
- 3) Reduce background noise levels

These practices not only help students with special needs but also regular students as well.

ICU needs to continue its personal approach to provision because this is one of its greatest strengths. However I feel it needs to match this with a more specialized knowledge of various disabilities in order to improve the service it provides to current and prospective students who have special needs.

Questions are welcome

資料（２）：書簡

September 3, 2008

During the spring of 2007 I remember being very stressed. Not only did I have to complete my second year of Japanese Studies at the University of Sheffield but I also had to apply for a year abroad placement. The stress stemmed from the fact that many Japanese universities appeared reluctant to accept me. This was due to my deafness.

I was born severe to profoundly deaf in both ears. I have lost most of my high frequency hearing and can hear roughly 25% of speech. I grew up in London to non-deaf parents, I wear hearing -aids in both ears and use other specialist equipment. My parents did not learn to use sign language and so I was brought up to be 'oral'. Speech therapy and other specialist input from an early age helped me to become competent at speech.

Although I do wear hearing aids, they cannot give you back the sound that you have lost. They are merely amplifiers of sound; consequently I rely on lip-reading in most of my day to day life. My friends soon realise that they have to be looking at me in order for me to be able to understand what they are saying. My lip-reading in English is good but I still have to 'guess' words and 'fill in the blanks'. My competence in English is such that I am able to do this correctly most of the time. However I have found lip-reading and 'filling in the blanks' to be most challenging when learning a foreign language.

I began studying Japanese at school. My school offered French, German and Japanese. Originally I chose to do French. However, it was too difficult for me because I found it had too many sounds in it that I could not hear. German was also very difficult because although it was lower in frequency, many sounds are made using the back of the throat. This meant that lip-reading was impossible. Consequently I opted to do Japanese.

Although Japanese was for me, the easiest of the three, I still find it difficult. Due to my hearing loss, high frequency sounds such as 'chi' 'shi' 'tsu' and 'su' are almost impossible to distinguish.

Since primary school, while in lessons I use a radio-aid in addition to my hearing aids. This is a small device which the teacher wears around his or her neck. It picks up the teacher's voice, amplifies it and then sends it (like a radio) directly to my hearing aids. The reason why it is useful is because the radio-aid can cut out unnecessary/background noise. At Sheffield University I used a radio aid in every lesson. I also had a note taker for all of my lessons which were lecture based.

I was surprised to realise that in Japan it is rare for deaf people to have access to an integrated tertiary education. Sheffield University struggled to find me a placement for my year abroad but thankfully ICU said they were willing to support my needs and so September 1st 2007 saw me arrive on campus to take up residence at Second Men's Dormitory.

Within the first few days a meeting was set up between myself and the JLP department to discuss my needs. I am not sure what the JLP staff were expecting but I suspect that after that initial meeting they may have felt that providing me with support would be easier than they had anticipated. Although there was limited specialist knowledge within the department with regards to provision for deaf students, I was very impressed and thankful that the ethos of the department was such that staff were willing to both learn about my needs and also meet them in any way they could. At that meeting we set up the following system which would help me complete my course. All of my teachers would wear a radio aid in lessons. The teacher would wear it around his or her neck like a necklace and it would pick up the sound of their voice and transmit it directly to my hearing aids. I had brought my radio-aid from the UK and was responsible for looking after it, handing it to the teacher at the start of the lesson and to recharge the batteries in it every night. The radio aid had a big effect on my ability to understand what was going on in class and caused little disruption to the flow of teaching or to the class. Initially this technology caused a bit of a stir but soon everyone in the class grew accustomed to it.

Obviously the section of the course that posed the biggest problem for me was the listening aspect. In the first term the class watched the film "My Neighbour Totoro" 「隣のトトロ」. I tried to watch it but due to it being anime, I found it impossible to follow. Not being able to lip-read an animated character meant that I had to concentrate very hard to try and catch what was being said. We also had a class that involved listening to a tape. This was also very difficult for me and I would often come out of the class feeling very tired due to concentrating so hard and frustrated due to often getting all of the answers wrong. It was decided that it was not fair to make me participate in the anime film class and that it would be better to focus on other areas instead. Consequently for two lessons a week I had out of class, one-to-one support instead. In these classes which were with final year ICU Students, I would go over the work I had done in class and query things I found hard or might have missed. One of our exams was based on reading aloud in Japanese. I found that these lessons were very useful for improving my pronunciation of certain sounds and to help establish a normal reading speed.

In the UK deaf students get extra time for completing their exams and this was another thing that ICU implemented. Although I did find accessing the course difficult I was anxious that the help I received was not disproportionate to my needs. I do not think that this was the case and with the support I received I was able to experience the JLP Intensive language course in the same way as anyone else. It was a very strenuous course and the support I received certainly did not mean I was 'coasting' through it.

Although I had extra support, I feel that I also put in the level of effort required by my teachers.

Obviously deaf education at a tertiary level is a two way street. The deaf student, as well as the institution, both have to make an effort if an integrated education system is going to work. An integrated form of education fails if one side is unwilling to co-operate with and understand, the others point of view. On the side of the university this means realising that each disabled student will have different needs and require an education package that is tailored to them. The student also has an obligation to realise that they cannot have everything and should accept that they must not rely on extra support to carry them through a course.

I feel that my success at ICU is evidenced by the unique support package that was put in place for me and by my completion of the year.

I hope that my experience at ICU inspires other hearing impaired students to consider the possibilities of integrated tertiary education in Japan. I also hope that ICU realise that they have the ability to not only to provide this kind of service but to provide it well. For many, the experience of a year abroad is one they never forget. My year abroad was certainly unforgettable. I suppose one of the things that makes me cherish my memories of ICU is that I realise just how lucky I was to be accepted. ICU could have easily dismissed my application as being too much 'trouble'. Luckily they gave me a chance. I hope that ICU realise how grateful I am for that chance and how effective the support they provided actually was. I hope that ICU explore the possibility of accepting hearing impaired students in the future and expanding the services available to them. I found ICU to be a great university and it would be a shame if others could not experience it solely due to being deaf.

I would like to take this opportunity to thank all those at ICU who were involved in my everyday education and support needs during my year abroad. This includes all of my teachers, student assistants and the head of the Japanese Language Programme. I hope I did not disappoint you and am indebted for all the effort you put into my education during my year in Japan.

(サインは省略)

Joseph Rees

BA Japanese: The University of Sheffield (UK)

OYR 2007/8 International Christian University (Japan)